



奮発心



3年生は修学旅行から無事帰ってきましたね。土産話や先輩たちのイキイキとした表情を見ると、益々、来年の修学旅行が楽しみにになりますね。以前、私が修学旅行の引率で京都に出かけた時、大徳寺で見かけて購入した「奮発心」という本を思い出しました。読んでみるとなかなかおもしろいものでしたので、みなさんに紹介します。

黙っていても、つらいことしんどいこと重たいことは、どんどんふりかかってくる。そんなとき、疲れていたら、たちまち押しつぶされる。中間試験、期末試験、模擬試験、入学試験、就職試験……世のなかは試験だらけ。

「試験さえなかったら、学校生活はどんなに楽しいだろう」と思う学生はあとを絶たないし、実際、試験の結果が悪いのを気にして思いつめてしまい、家出したり、ついには自殺してしまったり、悲しい結果になることが多い。自分で自分のいのちを絶つなんてよほどのことと思うが、しかし、その子を生んだ両親の哀しみはどれほどであろうか。愛する者を失う苦しみは耐えがたい試練だ。どうしてこんなことになるのだろうか。社会が悪いのだろうか。「勉強しろ、勉強しろ」と尻をたたき親や先生がゆきすぎなのだろうか。それとも、その重圧に負けてしまう本人が意気地なしだからだろうか。

理由はいろいろあるようだが、しかし、どれも決定的な原因とは思えない。

やはり、心の問題ではなかろうか。

こちらが何にもしなくても、世のなかのほうから次々とものを投げつけてくる。どんどん時間がすぎてゆく。片づけなければならぬことが目白押しだ。生きていくということは、次から次へとふりかかってくる重荷を、一つ一つ片づけていく仕事である。

今日しなければならぬことを明日に持ち越すと、明日は二倍の勉強が待っている。それをまた明後日に持ち越すと、さらに重く重くのしかかってくる。

だから、「ああ、重たいなア。ぼくはもうだめだ」「私は、もともと能力がないんだ」と思い込んでしまったら、世のなかに闘わずして降参してしまうことになる。もう負けているんだ。これでは、めんどうになって、死にたくなっても不思議はない。

死にたかったら勝手に死んでもよいが、しかし、それでは、この世にせつかく生を享け、五体満足に仕事ができる、勉強ができる、楽しく遊べる そんな自分もったいないではないか。

人間には無限の可能性があるし、個人にはそれぞれ自ら進んで発揮する能力がそなわっている。そして、この本来誰にでもそなわっている能力は、グズグズウジウジ思い悩んでいてもちっとも現れてこない。

ほんものの力は、何といっても行動、行動、行動あるのみ。見えない、しゃべれない、ありとあらゆる弁解の許されない立場、自分の本業に没頭し、それになりきった、シャキッとしたところ、これこそ能力を発揮している姿といえるのである。

ところが、この持てる能力が周囲の影響でくられている、縛られているというのだ。だから、ものごとが自分の思うとおりに動かないと、やれ親が悪い、先生が悪い、上司が悪い、世間が悪い、制度が悪いといって、何でも他のせいにしたがるのだ。

宇宙に存在するすべての物体は、それぞれ独自の回転周期を持ち前としている。そして、この自転と公転のバランスが保たれていることで共存だ。お互いに影響し、影響されて独立独歩の世界が構成されている。それなのに、周期の影響でくられているといって不満を持つ。そのこと自体、自分にそなわった独自の回転周期が活発に活躍していないことの証左である。

この期に及んで、自分がこの世に肯われているか否かという問いかけはずいぶんと遅れている。ちょっとでも考えあぐねている時間があつたなら、すぐその手で転回するに限る。他人の決めた枠のなかで一生を終えるというのでは情けないではないか。

「考える」をやめて次へ動く。「批判」をやめて仕事をする。一步でも、半歩でもよい、進めたら進めただけのことはある。平生から少しでも動いていれば、いざというとき、何かに応じもし、通じもする。「今さら」とか「これから」とかいうのは、ズルズル後退した弁解でしかない。

今、この瞬間しかないのだ。やるなら今なのだ。

こちらが何もなくても、重たいことがいっぱい落ちてきて、全身のあちらこちらにどんどんたまっていく。これを元気に一つ一つ弾きかえしていく。

この弾きかえすときの瞬発力を、私は「奮発心」と名づけたい。

今、この若く元気なうちに、自らをまっしぐらに進める「奮発心」を身につけてしまおうではないか。私も負けずに頑張りた

昭和54年10月 大徳寺大仙院住職 尾関 宗園 「奮発心」(徳間書店)より

この文の概要は次のようにまとめられると思います。

「考える」をやめて、次へ動く。 「批判」をやめて、仕事をする。
自分の仕事をどンドン片づける。 自分の手が、口が、勝手に動く。
重たいと思ったら、もう負けている。 元気で軽やかな心——それが奮発心だ。
あなたの中には、あなたがまだ知らないパワーがある。
私の中には、私がまだ知らないパワーがある。
それなのに、「もうだめだ。仕方がないさ」と、勝手にあきらめてしまうあなたや私。
大切なのは、昨日のつづきの今日ではなく、明日へつづく今日ではなく、
今日一日、この一瞬を、精一杯生きること。
明日のために今日を生きるのではない。
次の何かのために今を生きるのではない。
今という今、こうしていのちを得て、何かができる喜び、大事なものはそれだ。
新しい今を、喜びの心で迎えることができることを発見した私たちの前に、

不思議に可能性の花はその場で開く。
今、ここで全力を尽くす 人間の力に限界はない。

来年の修学旅行。この尾関宗園さんがいた大徳寺大仙院は修学旅行で訪れる京都にあります。班別行動で訪れることができます。この大仙院にも行くチャンスはあります。ひょっとしたら尾関宗園さんにも会えるかもしれませんよ。



尾関宗園(おげき・そうえん) 臨済宗の僧侶、大徳寺大仙院閑栖

1932年、奈良市に生まれる。高校3年のとき仏門に入り、以後、奈良教育大学を経た後、相国寺僧堂にて雲水修行を積む。1965年、京都大徳寺山内大仙院の住職となり、2007年、閑栖となる。院内でのユニークな法話は、和尚の包容力ある人柄も加わって、いって好評である。高齢を感じさせない、豪快・明朗な様子と堪能な英語を盛り込んだユーモアあふれる語り口は、訪れる人々に生きる力を与えてくれる。